

聖書に親しむ

2014年聖書週間(11月16日~23日)

テーマ:「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」(エフェソの信徒への手紙 2章14節参照)

2014.11.16

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00160-1-880256 (宗)カトリック中央協議会データ口

巻頭言

「聖書」は神様から私たちへの愛の手紙です

カトリック札幌教区司教 勝谷太治

私が教会と出会ったのは高校2年の時でした。それまで、仏教の環境にどっぷりつかって生きてきた私にとって、「聖書」をはじめ教会で出会う事柄すべてがそれまでの人生では味わったことのない新鮮な驚きの連続でした。そして、洗礼を受けた高校3年から浪人を経て大学に入学する頃は、霊的な深まりを求めているつもりで、今から振り返ると、実は知的好奇心のレベルで教会の霊性や聖書の教えを貪るように吸収しようとしていた時期でした。知識が増えるにつれ、自分がいっばしの霊性を備えた信者になったような思い上がり私を支配し始めていたように思います。

そんな「立派な私」の自己イメージが打ち砕かれたのは、東京で出会った分かち合いのグループと、8日間の個人指導による完全沈黙の黙想会に参加してのことでした。毎週行われていた分かち合いは、主に聖書の分かち合いと、生活の見直しでした。聖書の分かち合いでは、毎回、自分の思いもよらないような理解や解釈に接して、自分の聖書理解の浅薄さを認識させられましたが、何よりも「みことば」がその人の中で神秘的に働き、その人を変えていく様に立ち会った経験は、生きた神を感じさせられる信仰体験でした。そして、生活の分かち合いでは、仲間を鏡として映し出される自分のありのままの姿に、それまで勘違いしていた「美しい自分」の幻想は砕かれていきました。しかし、それは一方で心地よい体験でもありました。立派な自分ではなく、欠点や弱さをもった自分がありのまま受け入れられているという体験でもあったからです。そして、それを確信させてくれたのも聖書のみことばでした。



黙想会では、それまでの一面的な聖書の読み方を一変させられる体験をしました。それまでも、人生を振り返って、その時々にも働かれた神の導きや恵みを発見するような黙想はしていましたが、聖書はその理解を助けてくれる補助的な役割でした。しかし、旧約聖書の詩編や預言書に出てくる「イスラエルよ」等で呼びかけられる神のみことば(例えば、詩711やイザ43)を、呼びかけの部分自分の幼児期に呼ばれていた名前に置き換えて味わうという読み方をしたときに、聖書の味わいは一変しました。聖書は神認識と教えの理解を助けてくれる参考書ではなく、自分に直接語りかけられる生きた神のみことばとして、心の中に染み通り響き渡ったのです。その時、「みことばに生かされる」という意味を知ったのです。さらに新約聖書の場面に自分を置く黙想。ただ単にその時に心に響くみことば(単語)に集中して味わう黙想等、様々な聖書の祈り方を体験していきました。そうして、聖書は決して汲み尽くすことの出来ない無限の恵みの宝庫であることを実感したのです。聖書は、私たち一人ひとりに向けられた神からの「手紙」です。それぞれの人生の数だけみことばはその人の中で固有の意味を持ってその人を生かし続けるのです。

今年のテーマ:「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」

(エフェソ2・14 参照)

カトリック長崎大司教区司祭 古巣 馨

長崎は原爆公園のすぐ傍に住んでいます。被爆者でもないのに、毎年8月の記念日が近づくとなぜか身がこわばっていくのを感じます。全国から押しかける自称平和推進者と名のる人たちの反戦、反核、追悼、平和の集い。プラカードと横断幕を掲げ、渋滞をよそにシュプレヒコールを上げながら車道を闊歩する狂気。はたまた、タオルで顔を隠しヘルメットを被った一団や、軍歌を流し恫喝するように進む不気味な街宣車の放つ音量にガラス窓が揺れる。乱舞し連呼される「平和」に、あの日の静寂さは嫌気がさしたように姿を消します。その間、眉間にしわをよせ「この時期が、いちばん辛かですなあ」と、市場の片隅で挨拶をかわす町内会の人たち。平和旬間が終わると、再び蝉の音が祈りとなり、普通の人たちの普通の暮らしが戻ってきます。被爆地の歳時記です。

「平和とは、国際関係で戦争と戦争との間の騙し合いの期間」と定義したのは、『悪魔の辞典』の著者 A. ビアスです。願きたくはありませんが、言い得て妙です。あれ程の犠牲を払ってまだ70年も経たないのに、騙し合いの限界なのか、世界はにわかにな臭くなっています。武器や核兵器が消え去り、戦争が終わればみんなが願っている平和は本当に訪れるのでしょうか。人の知恵と力の限界を感じながら、それでも人類は願い続けています。争うことのない、穏やかな生活という平和。それを勝ち取るための絶え間ない闘い。私たちがたどってきた平和への道は、神が用意され、計画されたものと同じなののでしょうか。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります」(エフェソ2・14)。キリストこそ、人間が願ってやまない平和そのものだと伝えるパウロ。彼は決まり文句のように、“恵み”と“平和”を併記してキリストの福音を伝える切り口にしています。平和はどこから生まれ、どのようにして保たれ、受け継がれていくのかを示唆しているみことばです。

「あの人ほど、清く、義を生きる武人はいない。もし、秀吉の寵愛を失わなかったならば、日本で第一の大名、武将になっていたことだろう。ただ、

右近殿は自分の信じる神により大きな義を誓って、まっすぐに生きておられる」(ルイス・フロイス『日本二十六聖人殉教記』第10章)。日本の戦国時代、キリストゆえにあえて降りて行く道をたどった盟友高山右近を追慕する前田利家の言葉が残っています。天下統一という平和の御旗のもと、血みどろの戦に明け暮れる時代に右近はまったく異質な平和に出会ったのです。右近にとって、追放されるすべての土地は平和の福音を告げる地となります。苦しみと恵みと平和の神秘に触れたのです。「右近殿の模範的な質素な生活は、人々を納得させます。右近がいるところには、必ず教会が生まれています」(ルイス・フロイス)。降りて行く人の先に生まれたのは、キリストの平和でした。

「この人の居るところは平和でした。自分の都合を言わない人でしたから。あゝ、この人はこの人でしたか。ミネやんは神さまの子どもでしたか。今わかりました。」33年におよぶ精神病院での人生を終えた信徒ミネやん、最後の居場所に司祭館をあてがわれた通夜の時、お悔みに来た病院の掃除婦が涙を拭きふき私に告げた言葉です。生前、一度だけ心に秘めた素朴で一途な思いを吐露したミネやん。「せっかく洗礼を受けました。だから、私は死んだとき、あゝこの人は神さまの子どもだったのかって、言われるのが夢です。そのためにここで、平和のために働くことです」(マタイ5・9参照)。その方法は、自分の都合を捨てることでした。十字架上で野たれ死んだイエスを見て、「本当に、この人は神の子だった」(マルコ15・39)と告白した百人隊長とあの掃除婦の女性が重なりました。

戦国時代の高山右近も、長崎の小さな教会の名もない信徒も、「キリストの平和が、その心を支配した」(コロサイ3・15)人たちです。「十字架の血によって平和を打ち立て」た(同1・20)キリストに出会ったとき、一番低いところまで降りて行き、自分の都合を捨て、仕えて、仕えて生きる人になったのです。主張し、奪い合うところに飢えは広まり、砕いて分け合うところに有り余る豊かな恵みが生まれます。キリストの平和です。

—聖書は旅路の友—

御受難修道会司祭 来住英俊

密輸犯（女性）がシスターの服装をすれば、信用されて税関を通りやすくだろうと考えました。しかし、機内を巡回するベテランのキャビン・アテンダントがこれは本物のシスターではないと見抜き、空港に通報したので、待ち受けていた警官に簡単に逮捕されてしまいました。なぜ、彼女が本物のシスターではないと見抜くことができたのか？ 答えは、……彼女が機内でずっと聖書を読んでいたからだ！

これは考え落ちのジョークです。話すときかなりの人がポカンとします。しかし、私にはたいへんリアリティがあります。聖書をずっと読んでいるシスターとか神父はたいへん怪しい姿で、目立つでしょう。修道女なんぞといっても、実は聖書を読む習慣などないのだという宗教者批判のジョークではありません。彼ら、彼女たちは時間が有り余って困る場合、何をしているかという話なのです。

私は何度も国際線で長時間飛行機に乗り、カトリックの司祭や修道女らしき人を見ました。しかし、聖書に読みふけっている姿を見たことはありません。寝ているか、映画を見ているか。あるいは、会議書類らしきものに目を通して。ペーパーバックの冒険小説を読んでいる人も多い。それが証拠に、どこの修道院でも読み終わったペーパーバックが（再利用を期待して）蓄積されています。つま

り、司祭や修道者は「時間がない、時間が足りない」と言いながら、時間が有り余って困る場合は、無理矢理「時間をつぶしている」のです。英語で、kill time、時間を殺すと言います。

国際便の機内こそ、レクチオ・デイヴィナ、聖書を素手でゆっくり、一言ひとこと読むといいのではないか。注解書も辞書もないから、素手で本文を読むしかない。それはむしろ好条件です。私はロンドンからメルボルンまで直行便に乗ったことがありますが、終わりが見えない長い長い時間でした。腹を決めて、聖書を開き、読むともなく読み、時々ある章句を思い巡らし、時々ぼんやりとしていました。何度も食事が来ては去り、来ては去り、うつらうつらと半睡の時間もありました。でも、聖書はいつも膝の上に留まっていた。神とともにある穏やかな幸福を感じました。

ロザリオを繰るといいう手もあります。先の密輸ジョークでは、ずっとロザリオを繰っていたので偽シスターとばれたというバージョンもあります。しかし、長々しい旅の時間を過ごすには、聖書をのんびり読む（祈る）のがいいと思います。これこそ聖書を旅路の友として人生を歩むことです。新幹線でもできます。長距離のビジネス・トリップの多い方にお勧めしたいです。

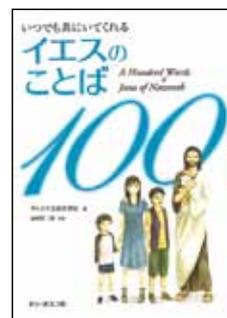


良書のすすめと読み方

①いつでも共にいてくれる『イエスのことば 100』 サレジオ修道会日本管区 編 浦田慎二郎 監修

2013年 ドン・ボスコ社 500円+税

聖書を読みたいけど、どこから読めばいいのだろうと思っている方は、まずイエスのことばに触れるのはいかがでしょうか。新約聖書の中から、イエスの語ったことばを100に絞り、それに簡単な解説をつけています。この本のねらいは、イエスのことばを、キリスト教の信者だけでなく、今の日本に生きるより多くの皆さん、特に若者たちに新しい形で伝えることにあります。2000年もの間、時と場所を超えて大きな影響を与えてきたイエスのメッセージが、いま新たな息吹に満たされて皆さんの心に届きますように。サブタイトルの「いつでも共にいてくれる」は、イエスという存在が共にいてくれる、という意味と同時に、イエスのことばも共にいてくれるという意味も含んでいます。



②絵で見る『はじめてのキリスト教』 子どものためのカトリック入門

クリスティン・ペドレッティ 作 ミシェル・デュボ 監修 つばきうたこ 訳 関谷義樹 日本語版監修

2013年 ドン・ボスコ社 1400円+税

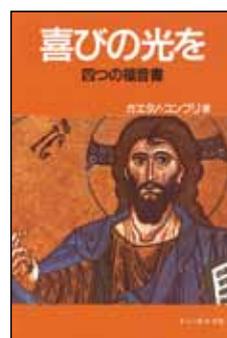
旧約・新約聖書の物語を全体的に網羅し、さらにカトリック教会の歴史、聖人たち、教会の教えなどを親しみやすい簡潔な文章とイラストで解説したキリスト教の入門書です。子どものためのカトリック入門とありますが、大人の方がもう一度総合的にキリスト教を捉え直すためにも最適な本だと思います。フランスの司教で、この本の監修をしたミシェル・デュボ司教は序文で次のように述べています。「神さまの望みは、きみが神さまのこどもになって、すくすくと成長してくれること。神さまはきみに、友だちとたいせつなものを分かち合えるようになってほしいんだ」。聖書やその他の良書を読むことの目的はここにあるのですね。



③喜びの光を 四つの福音書 ガエタノ・コンプリ 著

1988年 ドン・ボスコ社 1200円+税

サレジオ修道会ガエタノ・コンプリ神父の好評の光シリーズの一冊。本文を引用しながら、四つの福音書の中のイエスに関する情報を連続物語の形で整理し、話をつないだりまとめたりして、流れがわかるようにしています。また日曜日のミサで3年周期で読まれる福音書の箇所を優先的に引用し、その前後関係を説明しています。教会でのカテキズムや学校での宗教・倫理の授業にも最適です。



◆編集後記◆

今年の聖書週間のテーマは「平和」となっております。世界各地で起きている戦争、それは日本に住む私たちと関係ない出来事ではありません。日本では、政府の憲法解釈の変更により集団的自衛権の行使が現実味を帯びてきました。フランシスコ教皇も私たちが積極的に平和を守っていくことを何度も呼びかけておられます。私たちが聖書を通じて「平和」について考える機会となることを願っております。ご執筆いただいた勝谷太治司教様、古巣馨神父様、来住英俊神父様には心にしみる、分かりやすい解説をいただきましてありがとうございました。良書をご紹介くださったドン・ボスコ社にも心より感謝申し上げます。

◆献金のお願い◆

この『聖書に親しむ』は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願い致します。

振込先：郵便振替 00160-1-880256 (宗)カトリック中央協議会データ口